

友染火鉢

泉鏡花作

私^{わたし}たち作者^{さくしや}なかまの草紙^{さうし}樓^{ろう}が、前^{ぜん}年^{ねん}の秋^{あき}の洪^ひ水^{みづ}に、
其^{その}の知^し合^あを、水^{みづ}見^み舞^{まひ}に行^いつて、上^う野^{への}の大師^{だいし}寄^{より}、櫻^{さくら}木^ぎ
町^{ちやう}の片^{かた}蔭^{かげ}を、強^{つよ}い西^{にし}日^びを除^よけて通^{とほ}りかゝると、

「旦那^{だんな}々々、」

「おや、變^{かは}つた所^{ところ}で。」

と言^いつたも道^{だうり}理^り。比^び羅^らも、暖^{のれん}簾^{せん}も新^{しん}店^{みせ}の、蕎^{そば}麥^ば屋^や
の格^{かう}子^し先^{さき}に立^たつて居^ゐて、いきなり聲^{こゑ}を掛^かけた天^あ窓^{たま}の
禿^はげた年^{とし}紀^{きはへ}の親^{おやぢ}仁^にの、中^{ちう}形^{がた}浴^ゆ衣^{かた}三^{じやく}尺^{ちやく}で茶^{ちや}澁^{しやく}の面^{つら}は薄^よ
汚^これたが、何^ど處^こかに底^{そこ}磨^{みが}きが掛^かつて、あかの抜^ぬけた
のは、上^う野^{への}の此^この邊^{あたり}とはづゝと見^{けん}當^{たう}違^{ちが}ひの、或^{ある}其^{その}の
劇^{しば}場^あで顔^{かほ}馴^{なじ}染^み。三^み河^{かは}の九^{きう}七^{しち}か、三^み谷^{たに}の九^く助^{すけ}か、三^{さん}九^{きう}
で通^{とほ}つた留^{とめ}場^ばの若^わ衆^{かいしゆ}であつた。

「親^{しん}類^{るゐ}廻^{まは}りかね、彼^ひ岸^{がん}の參^{おま}詣^りには飛^とんだ早^{はや}過^{やす}ぎ

る。」

云^いふ 風^{ふう}采^{さい}ではなかつたが。

「旦那^{だんな}、」

へん、と三九は額で笑つて、下目を斜違に暖簾を覗いて、

「今度其の、へん、こんな事をはじめましたんで、料理屋、待合とでもありますかい、町が、此の櫻木町で、藪、更科と来ちやあ、何方もね、お寺も同然でございますよ。お宗旨違ひかも知れませんが、些と何うぞ、お通掛りに御参詣下さいまし。」

「正に通リ掛つて居る、参詣しようか。」

と帽子を取つて、

「御免よ。」

「入らつしやい。」

と、帳場から、一寸昔の忍ばれる黄楊の櫛の女房と、赤い襷の小婢が諸聲なり。

「大層な景氣だね。」

「此の通り、満員でございますね。へん、其の癖、お涼い事は承合なんです。二階はございませんが、づつと奥へお上んなすつて召上つて下さいまし。」と、三九は土間をあと退りに框に添つてあひしらぶ。

「難有う、が却つて、此處が可い。よく風が通すから。」と客は、さら／＼と暖簾の揺れる、入口の端近へ。

「彼方も涼うございますが、思召次第、お心安い方が可うございます。」

と言ふ、向うが生垣の田舎めいた小庭を前に、縁に腰を掛けて、後向で、涼しさうな冷麥で、銚子を二本ばかり並べて手酌で飲んで居る、半纏着の、色の白い、肩つきの、すらりと意氣な、年若な男が一人、折から他に客はなかつた。

「早速、お齋にありつきませうか。」

「齋は酷いや、旦那、精進ものでも割はうんと利かしてあります。否、手前ものを、恚う言つちやあ旦那の前でございませがね、根が、」

と屈腰で、框の縁に握拳で、

「好きから思ひついてははじめました家業なんで、亭主八杯でございませから、釜前も随分氣を入れて居りますんで、へい。粉も本場の絹ぶるひつて所を一つ、めし上つて下さいやし、え、お誂はと？」

意氣込まれると、胡坐には些と早し、整然と坐るも變なりで、小さな麻蒲團の上へ立膝して、草紙樓は紹の羽織の紐を解くやうな手つきをして、紛らかに俯向いて、

「然う言はれると、面目ないがね、此の残暑だし、陽氣が悪い。」江戸兒の蕎麥屋さんにや、

別して申兼ねました、私の所は餛飩をね。」

「えゝゝ、結構、餛飩はまた格別手打でございます。冷したのを召食るんで、」

「何ういたしましたして、玉子とぞ。」

三九は腰を切つて、づいと立つて、

「とぞー、餛飩臺。」

と意氣込んで、顔を赤くした、些と頓興。

酒は飲むよ、私も男だ。」と笑ひながら、客は、何故か、羽織を脱いで氣勢つて言つた。

「何うも、御丁寧で恐入る。」

お爛は私がお加減を、で、三九が自分で釜前へ立つて、やがて銚子を運んで来て、旦那故ツとお酌を、と割膝の桃尻で畏つた時、客は、猪口を仰向けて恚う言つた。が、單に亭主のお酌ばかりに就いてはなかつた。然うして爛の出来までに件の帳場の黄楊の櫛が、小婢も待たず自分で團扇を持つて出て来て、そよ／＼と煽いだから、お使ひなさいまし、と會釋つた上、羽織を、すツと言はせて、トんと疊んで引退つた、それをも籠めた慇懃である。

「いや、何うも、」

三九は一太刀浴びたやうに、仰山に額を壓へて、「却つて御迷惑でございませうが、お馴染効でございまして、難有い事で、へい。つい、

まだ、づぶの新店だもののでございますから、御覽の如く、伽藍の如しで、否、駄洒落どころぢやございません。それでも出前の方は、お蔭様で、

此で可なりでございます、と言ふのは、旦那も、水

見舞に、恚うやつてお出掛なさいました
はてな、何うしてか知つて居る。」

「右の洪水で、根岸邊から、近廻と言ふので、此の
新開の新築ならびへ大分お立退きで、昨日、今日、
御混雑の最中、盆も暮も一齊で、蕎麥、素麵をお支
度がはりになさいますんで、人様の御難儀を、旦那
の前でございませが、出前持は、奴を振つて歩行
ます。が、悲い事には、店がと申すと、此の吹抜け
ぢや」

樹立を通す青い風が、紺の暖簾を颯と吹く、櫻木
町は森の影。

「晝寐の他はございません。全くな、奥店かけて、
お二人、御一所のお客様は、今日がはじめてござ
いますんで、三九庵大人の氣がいたしますよ、へい。
え、然やうで、では、故つと頂戴、こ
れは飛んでもないこと恐入ります。」

と一杯うけて、
「奥に在らつしやいます、若旦那、」

若旦那と言ふか、

あの印半纏を。

見た處は職人であらう、兄哥らしい。

「矢張りその。」

と杯をうけて居る拳を、唇に當てゝ、ちゆうと吸つて、疊の縁へ一寸置いて、

「芝居で、お馴染様をな、旦那、私、木戸口で見掛申しまして、平にお附合を願ひましたやうな次第で、へい、へゝゝ。飛んだ宿場の、ツンノ、テンの幕開でございますよ。」

「迫つては御本陣承合ひ、とお祝ひ申すがね、御主人みづから宿引は、樂でないね。」

「まさか、旦那、晝旅籠から立詰ぢやございませんよ。と申して、下心は矢張り馬方の影

でも覗きに出たのでございませうが、先刻な、ふと、此の門口へ立ちますと、それ、向うの、」

と禿頭を、下に沈めて、上目で戸外へ見當を付ける奴。

「あの樹林の間を、飛々に三軒目の、

眞新しい二階建の、あの、お邸

唯今、旦

那がお立寄りでございました。」

道理こそ知つて居た
根岸なる御行の松
のあたりから、水難を、こゝに避けた、件の家を見
舞つての歸途なのである。

「御覧じまし。」

と三九は、客が差置いた團扇を逆取つて、柄でさ
して、ト及腰で搔分けるやうにすると、ひらめく暖
簾に、木の葉も揺れつゝ、二階が見える緑の中。

「表の縁に、

あれ、水々とした青簾が、

まだ捲いたまゝ立掛けてございませう。それ、簾に
ちら／＼と挟つたやうに、楓の葉が、恚う、冴えた
朱だの、艶々しい群青、萌黄、磨いた漆が光るばか
りに交りました薄もみぢと言ふので、おのづから此
の西日を避けて、月が射すほど綺麗に涼しく見えま
せう。光琳模様の、繪漆の、大きな桐火桶なんでご
ざいますかね。」

客は三九に指さされて、緑の風にちら／＼と動か

した雙さうの瞳ひとみを、屹きつと据すゑると、居直ゐなほつて、黙だまつて、
そして、ゾツとしたやうに單衣ひとへの襟えりを引合ひきあはせた。

洵まことや、繪ゑの具ぐに水みづの滴したるばかり、簾すだれながら影かげの映さす、其その空そらばかりは雲くも澄すんで、藍あゐの深ふかい淵ふちの如ごとく映うつる目めに、―― 遮さへぎつて揺ゆるゝ暖のれん簾れんに染そめた三さん九きゆうの二に文字もじも、裏うちを翻かへして草さう書じよの龍りゆうに見みえるのであつた。

亭主ていしゆは膝ひざの上うへに腕うで組ぐみして、差さ覗しのぞき状ざまの頤おとがひを寄よせつゝ、

「先せん刻こくな、唯たゞ今いまも申まをす通とほり、ふと何なに心こころなく戸おもて外へに立たつて、ああの火ひ鉢ばちが目めにつつきまますと、はつと目めが覺さめまましたやうな、然さうかと思おもひまますと、急きふに夢ゆめを見みたやうな、恚かう、ぼつとして、何なんの事ことはなない。私てまへ、魂たましひが五ごつぐららみに分わかれて、紅べに、萌もえぎ黄き、黒くろい。漆うるしと、一まい枚まい一枚まい、色いろが染そまつて、ばら／＼と散ちるかと思おもや、重かさなり合あつて、ちら／＼して、氣きが恍うつと惚りと成なりました

で、ございますので、ああの

團扇とともに、首を掉つて、

「奥の、若旦那が、其處へ、お通りが、

りを、お附合を願つてからまた出直して見ましても、
未だ何うも、夢のやうな氣がしてなりません。でござ
いますからな、思掛けなく、旦那が彼方様から出
て來らつしたので、吃驚して。
又夢ぢや

あ果しがゞあせん、今度は、漸と目が覺めました。

が、矢張り夢のやうでございますよ。」

「眞個だね。」と、深く思入つたやうに客も言
つた。

「へい、直き其處に見えかすのが、何故か、薄り、
霧か、霞で、幻のやうに見えます。——旦那、

些と大袈裟のやうぢやございませがね、何も、枝ぶ
りの佳い松を見たからつて、いきなり三寶、羽衣か
と思ふ狼狽ものはございません、錦葉を描いた火鉢
だつて、天女の住居と極つちや居ませんが、一目で、
魂のふら／＼と成る仔細、と言ふのがございますよ。

昨日の晝過ぎでございます。

根岸の奥

に、聊か縁類がございますので、此の出水でござい
ますから、私、其の一寸見舞に出掛けました。お定

りの、右の青竹の杖でがして、案山子が接骨醫に通ふと言ふ、氣の利かない形で、じゃぼ／＼、どぶ／＼と探りながら、金杉のあの通りを、据眼に成つて、とぼついて行くんでございますが、雲は掛つてゝも炎天で、氣の早いのは、着物を脱いで、頭へおせて、其の上へ麥藁帽子、引くるめの頬被りで、素裸。などゝ言ふ、異形なのが交りましたな。深うごわすな、流れる／＼。激流なるかな、生命の瀬戸だ。靜に／＼、なんて、往來で聲を掛合つた處は、泣くより笑で、頓と晝狐に魅まれたと言ふ體裁でございますわさ。

笹の雪横町を左に見て、平家方怨靈の露拂が、弓杖支いたり、と云ふ見得で、右の竹の杖で伸上つて、前途は何うでがせう。されば、御行の松は、づつぶりと沈みました。梢の處が、龜の甲ぐらゐ辛うじて浮いて、居ます、と嘘ばつかり。所が茶人が居ります、老い年をした隠居が、自棄にそんな事を言ひながら擦違ひますね。

唯目の前へ、俗に、おまじなひ横町と言ひます、

あの曲角まがりかどから、すつと泥水どろみづを切きつて、船首みよしを、通道とほりへ、漕こいで出でた小船こぶねがあります。と思おもふと流ながが一いち條じょう、浪なみを敷しいた花道はなみちに成なりましてな、濁にごつた中なかへ、蓮はすの花はなは佛染ほとけしみます、はつきり杜若かきつばたが咲きいたやうに、藤いぢぢ紫むすめの結綿ゆひわたの、娘まをと申まをすと世話せわす過ぎませう。媚なまめかしい、が品の可いい、それはく水際みづぎは立つた、お美しい嬢ぢやうさんが、お一方ひとかた。日當ひあたりぢやあ萎なえれさうな華奢きゃしゃなのが、立退たちきの躑たしなみ。端正きちんとしたお姿すがたで、唯たつたお一人ひとり。門番もんばんの爺ぢいやか、出入でいりの植木屋うゑきやか、と思おもふ、白しろい眉毛まゆげの房ふつぎりとした、半纏はんてんぎ着ぎの親仁おやぢが、眞新まあたしい手拭てぬぐひを引挟ひっぱさんだ腰こしを極きめて漕こいでるんでございますが、私てまへ、此この年配としでも正しやうのものは存ぞんじません。

大名だいみやうの奥方おくがた、姫君ひめぎみの火事くわじの立退たち、馬うまで、それ、薙なぎ刀なたで、あの、きりゝとした綺麗きれいな處ところを、錦繪にしきゑで見みて居ゐますが、そんなものではございませぬ、美人びじんの姿すがたは洪水おほみづを船ふねで遁にげる時ときに限かぎります。が、先方さきさま様さまは御ご迷惑めいわく。あゝ、雲くもが切きれた、赫くわつと日ひが當あたる。消きえやしなにか、とハツと思おもふと、扇せんす子をな、颯さつと開ひらいて、露つゆの垂たれさうな前髪まへがみへ當あてなすつた、撫子とこなつのみだれ咲ざき、其その片袖かたそでを弱々よわ／＼と凭懸よりかゝつて居ゐなすつたのが、あ

笛^つれ、
お調^て度^{うど}の、
あ^ゝの錦^も葉^{みぢ}の火^ひ鉢^{ばち}。
青^あ貝^を入^がり^ひの棚^{たな}が
一^{ひと}

四

「巻物だの、御本がね、旦那。」

と三九は手を重ねて仕方をして、

「其の書棚に並びましてな、火鉢との間に、扇子の陰の島田でさ、褥も脇息も、そりや見えやしませんや。けれども、書院から疊なりに、すつと水の上を浮出して、お出なすつたに宛然、と申しや、其の貴方な、お座敷の前後を、此方人等地下の者が土足で踏歩行くと同一で、お船の周圍へ眞晝間、異類異形な人通り、濁水をざぶ／＼遣る。極

りが悪いや旦那、お娘御にや、露骨でございますから、日除と一所に、ト其扇子で、御容子ツたらなかつたね。尤も、船は舷を向けて、通りを横に漕いで、扱て、あの流れに掛りました、が、可恐いもので、川幅だけ瀬を造つて、渦を巻いて流れて居ます、と思ふと船首が、ぐるりと向をかへて、ぐいと紫川を下りました。處へ青々とした柳の枝の引断れたのが、上方から、ざつと葉を巻いて流れて来て、船底を潜りさうに成つて、一靡きして舷に掛つた、づぶ濡の枝の中へ、細り白魚の指が掛るや！ 揺

れるぞ、落ちる身を、柳に縋んなさるんだ、とヒヤリとしますと

「一膝出て、

「旦那、お優しいねえ、柳を掬上げてお遣んなすつ

た。」

扇が眉をはづれますと、其の撫子は袖に咲いて、恚う日に翳して御覽なさる。白い手の、

柳の枝から、緑の雫が、すら／＼と落ちて、流の水も青く澄む

「あれ、あの簾の中に居なさるやうな影になる時、親仁が一棹、ぐいと張る船首が廻つて、向う横町へ、すつと船が入りました。が、其處ばかり、ものが涼しさうに見えたんでございましてね。」

え、かう、混々した、だらしない親類の家へ行つて、それから、私手傳ひましたが、何だか、いまの船を見た目ぢや、不思議に、龍宮の裏長屋で働いて居るやうな気がしますんでね、ばちや／＼疊の上を泳いでる金魚だの、ぴよん／＼鴨居を飛びやが

る蛙なんかゞ、何うだい、三九、なぞとね、旦那、
口を利きさうで成らなかつたんでございます。――
昨日の事で――

へい、
其の唯今が、お二階の同じ蒔繪

のお火鉢でございませう。御覽なさいま

し、何うやら、それ、火鉢の際に撫子の扇子さへ、
半開きで、そつと置いてあるやうぢやございません
か。驚いた！これは何うも。」

と目を摺つて、又暖簾を覗いて、

「ね、旦那、お姿は横町の水へ消えても、私の目
にやあ、昨夜から、まだ無く成らねえんで

一體、何うかして居りますかな。」と茫と言ふ。

扇子ぢやない、が、撫子の花とおなじ薄
い朱鷺色の、深草形なる團扇が、袖から、這つたや
うに、其の火鉢の横に落ちて居た。

其處に面影さへ立つのである。

「旦那々々。」

草紙樓は、二度呼ばれて、ハツとするまで、恍惚と其を視めて居た。

「全體、まあ、何ういふ方で在らつしやいますんで、失禮ながら、へい。あれ

でございますから、」

と何故か、聲さへ潜めながら、

「私なんざ、何うも、昨日、根岸の横町から、あの船のまんま、森の上を船で漕いで、二階へまで、宙をおいでなすつたやうな、妙な氣がして成りません。」

「串戯ぢやない、仙人や、魔法つかひぢやあるまいし。」

「否、其の天女。」と、手庇する。》

「お美しいがね、矢張り、たゞの、人間のお嬢さんだよ。おまじなひ横町を、お前さんが見たと言ふ、其の船で、一度、上根岸の親類へ立退いて、今朝、朝顔の露中を、早く彼處へ引越して來なすつたツて事だつた。」

「船で

それとも御歩行で？」

「何。」

と聞返して、客の草紙樓は堪へず笑つた。

「翼が生えて堪るものかね。」

「で、旦那、えゝ、焦つてえ、何う言ふお方でございますんで？」

「繪の先生だよ。」

「繪の先生、と御親父様が。」

「否、船に乗つた、其のお嬢さんさ。」

「はてね。」

「知つてるだらうがな、御近所に、毎年

やがて始まる展覽會で、人氣第一と言、ふ立女形だよ。梨の眞白な影が、水に映ると言ふ心の梨映と書いて
女史と稱ふる處だけれど――

お前さんは、羽衣だ、翼だと言ふがね――雲の中、山の手どころか、中仕切の暖簾からちらゝ、緋鹿子が見えようと言ふ、町風生粹の娘さんだから、其處で、お梨映さんゝと皆が言ふのさ。」

「あゝ あの方が。」

と三九が、片膝を躍らすばかり、發機に掛つて、ボンと敲くと、――帳場格子を乗出して、諸手へ、ばたりと團扇をば提げた上へ、顔を据ゑた黄楊

の櫛くしが、吃驚びっくりしたやうに胸むねを引ひく時とき、奥おくの縁えんの半纏はんてん着ぎは、銚子てうしを肱ひぢへ取とつて傾かたむけた。――垣かきに夕顔ゆがほは見みえないけれども、釜前かまへの湯ゆの薄煙うすけむりが、土間どまを抜ぬけつゝ、ふは／＼と其その半纏はんてんの襟えりに掛かる

「が、旦那だんな、餘あまりお若いわかい、御名譽ごめいよの方かたにしちやあ尤もつとも、田之助たのすけなんざ、十六じゅうろくで江戸えど一番ばんの立女形たてをやまでございましたがね。」

「二十三じゅうさん四しかな。」

「へい。」

「今いまなんざ、夕顔ゆがほの浴衣ゆかただつけ、勿論もちろん肌衣はだきなし、素足すあしだらう、一寸紅いちゆつとべにの入はいつた友染いっせんと、色縷いろじゆす子腹はらあは合せの帯おびか何かなんかで、結綿ゆひわたが少々せう／＼、ガツくりと成なつて、引ひ越こたての紛糾ごつたの間あひを、人ひとを除よけたり、荷にを潛くつたり、親御おやこ、妹弟きやうだいたち、手傳てつたひの人數にんずの中なかを、彼方あち此方こちして居あなすつた。生地きぢな所ところは尚なほ少わかい。立働たははたらきに上氣じやうきして、ほんのりとした顔かほで――いきなり格子かっしを開あけた私わたしを見て、―――框かまちへ膝ひざをトンと支ついて

(まあ)

思懸けない、とばかり、うつかり見なすつた、濃い
睫毛が、鬢のおくれ毛かと思はれる 内氣
さ、優しさ、淑さ、そして可愛らしさ、と言ふもの
は、九とも言ふまい、美しい十七八

「とんと早や、」

蕎麥九は小首を捻つて、

「駒込の吉祥寺へ、火で焼出されたと言ふ處を、
洪水で遁げた、お七と言ふのでございますよねえ。」
と、眉毛をもじや／＼と顔を上げる。

草紙樓は、ト息を吐いて、

「馬鹿を言へ！ 御壽命は千年だ。」

待てよ、まあ、しかし、まあ、其のまゝと言つても
可いなあ。」と杯の雫を切つた。

「何しろ、何うも、大したもんでございますな

あ。」と、何を恐入つたやら、三九は肩を揺つて、
首をぐつたりと腕を組んだ。

「一杯あげよう。」

「御神酒のつもりで。」

おとゝゝ、へい、

「ごさいやすー 櫻木町の氏神様でさ、ねえ、旦那

當年は、錦葉と一所に此處等花が咲き

ませう。森の下へ、づらりツと、飴屋、酸漿賣が並

ばうも知れません。御祭禮でございませうぜ。」

と又受けて、

「御内陣を伺つちや、何とも恐多い事でございます

すが、女體だけにな、氏は一層、心得て置きたい

もので、御本尊様は御一體でございませうか、乃至

「

「むゝ、そりやね、今はお一人だがね、何だ

そりや、蔭にはちゃんとお在でだよ。」

「へい、影に へゝゝ、影にしちや、餘

り判然とお在でなさいませうぜ。」

「え？」

「な、それ。」

「何處に、」

「それ、其處にー 猪口を持つて

「

「馬、馬鹿な、罰が當る。」
と、慌しく團扇を
煽つ暖簾を、ぴた
りと伏せた。

六

時に、何家かの女中が来て、蕎麥の出前を誂へた。

「蒸籠七つ　へツえい。」

と素頓興な聲で請けて、筒抜けに聞えるものを、三九故々立つて釜前へ通すが早いか、やがて忙しうに元の座へ

「で、旦那、何う言ふ事に成りました。」

「何う云ふ事とは？」

「呆氣ないや、お前はんが、」

と微酔の乗りが来ると、旦那則ち、お前はんで、

「格子戸の土間に立つて、お娘御が上框へ支膝で

トン　と其だけぢやあねえ　」

「何うにも、斯うにも、他に仕方がないぢやあな

いか　ー　長持の上で帯をしめて、衣服を着換へて、座敷へ船をつけさして、玄關を漕出したと云ふ、

其を聞いて、お見舞を言つて、残暑の砌、

此上とも、偏に、御身御厭ひ。　失禮、然

やうなら、他に仕方があるものかね。」

「理屈をおつしやりや其のまゝございませがね、
何だか何うも、もの足りませんぜ。」

「實はね、三的。」

胡坐で、客も三的に成る。

「然う言ふが實を言へば、私だつてももの足りない
んだ。」

「御覽じゃしな。」

「待ちなツたら、日は長い。」

と、西日は射さぬに、いゝ色で、

「もの足りないのは、あの、火鉢だ。思ひも寄ら
ず此家へ入つて、お庇で恂うして見られるんだ。が、
實は今日は、火鉢を見ないで歸るのか、と打明けて
言へば、殘惜くて、胸へポカンと穴があいて、空洞
で居たんだ。」

何年越、寐た間も忘れず、目に染まる錦葉の蒔繪。

先刻、お前さんは、うまい事を言つたね、魂が幾
つかに分れて、紅と、萌黄に染まるやうだと、言つ

た。火鉢を見ると、私百にも千にも砕けて、一枚々々、ちら／＼と錦葉に成る。

一體、島田鬮と友染で、あの前へ、すぐに姿に成らうと言ふ御本人のお梨映さんより、火鉢の方には、前にお目に掛つたくらゐ、淺からぬ因縁なんだよ。」

「それは又 へい、成程

「御免下さいまし ー 誰方様、と三指で、内弟子か、お小間使か、存ぜず、容色のいゝのが、可しかね。何某と申すものでございます、

お嬢さんはお宅にお在でございませうか ー 此だがね、御存知の容子だから、先生は堅苦しい、然うだつて、お師匠さんも相肖ひません、處で お嬢さんに一寸お目に懸りたう存じますさ。

何かの會で、一二度逢つた。見知越だつたから、やがて、取次いで、何うぞ、此方へ。お

取次の案内で、通されたのが、座敷なり、晝室なり、

お梨映さんのお部屋です。

すぐに庭の、日南の縁に障子が閉つて、二三輪咲いた、と思ふ、梅の枝の影法師。最う、ほんのりと奥床しい薫がする。

ト其の連子窓に黒檀の机が据つて、天鷲絨で額を取つた紫地縮緬の座蒲團が媚めかしい。が、其處に姿は見えないで、褥の前に据ゑてあるのが火鉢なんだ。蒔繪も火桶も、お屋敷過ぎる。繪を描いた火鉢ぢや分らず、桐の刳抜だと隠居様が撫でさうだし、弱つた。漸と考へて、お梨映さんに相應しい、此なら何うかと思ふのがある、友染火鉢。

周圍に、繪の具皿が五六枚、紅を溶きかけたのが一枚、灰に乗つて、眞紅な木の葉が、重つて、散りかゝつたやうな櫻炭からちら／＼陽炎が遊ぶ景色に、薄紫の火氣が立つ。

日當り一杯の明さに、ほろ／＼尉の白いのも、胡粉に見えて美しい。

遠音とほねに鶯うぐいすの聲こゑがして、しと／＼しと／＼と、八疊でふ
のまた片隅かたすみの、裏庭うらにはに向いた、明取りあかりとの腰窓こしまどの障子しやうじ
の外そとへ、大屋根おほやねから廂ひさしを傳つたつて流ながれるのは、雪解ゆきどけの
雨垂あまたれなんだが、蒼空あそぞらに遙はるかな富士ふじから引ひいて來きた化粧けしやう
の水みづの氣勢けはひがある。

色の白しろさも思おもはれよう、藤紫ふぢむらさきの結綿ゆひわた、半襟はんえりも紫むらさきの
一粒ひとつぶ鹿子かのこ。黒出くろでの縞八丈しまはちぢやうに、友染いづげんの下襲かさねをして、茶
と萌黄もえぎ翁おきな格子がうしの帶おび、核しんなしの薄うすいお太鼓たいこ。緋ひと淺葱あさぎ
を段染だんぞめの麻あさの葉はの長襦袢ながじゆばんで、曳手ひきてをフツと厭いとけたや
うに、――一寸ちよいと小刻こきざみの褌音つまおとが三つ四つ、密そと留とま
ると思おもふ時とき――襖ふすまから出でなすつたのが、お梨映りえ
さん。

――忘れわすれもしない、一昨々さく／＼年の二月きさつげの上旬じやうじゆん。前まへ
の晩ばんに、大雪おほゆきの降ふつた翌日あくるひだった

當日は障りなく、然うした美しいお梨映さんに逢
 へる瑞相と言つても可い。行く途中の、横町、露地、
 何處にも、上野の山がほんのり紫の霞を映して、垣
 根つゞきの庭、背戸の、常磐樹には青い空、葉のな
 い枝には日が薄紅く色を染めて、木戸、廂、生垣に
 消残つた雪も暖い。溶ける雫も春の水で、肩と擦々
 と思ふ低い所を、彼方、此方で、鶯の聲がする、と、
 桃の枝、櫻の枝、柳の絲と、其の聾を聞きたびに、
 目に見えないでも夢のやうに花の姿を視めながら歩
 行いたつけ。

お行の松に翼を休めて、白鷺が一羽。

それさへ、恍惚と幻のやうに思つた矢先、火鉢の
 錦葉は、現より、尚ほ濃かつた！

繪具皿の繪具より、ちら／＼色に立つ裾捌きで、
 其の座蒲團を、疊に敷いた袂の端より後へ摺すと、
 莞爾する口許へ袖を當て、優しい聲で、

（まあ。）　　と言つて、片手を下へ、一輪櫻の平打が重さうに、房り掛つた濃い藤色の結綿が、襟脚に揺れて俯向く。

「御挨拶をしなすつたんだ。」

と草紙樓が杯を拾ふと、

「成程。」　　と言つて、蕎麥丸は一つ叩頭をする。

「私はね、何も負惜みを言ふんぢやないが、繪の先生の處へ狼と變じて入込んだにしちや、其日の用と言ふのが餘りに巧計が無さ過ぎる、何、

或雜誌社から頼まれて、口繪一枚此が絹本でない、版下と言ふんだから、展覽會の立女形ともあらうお嬢さん、引受けてくれるか何うかね、且は急ぎなんだから、其上にも無理を肯かせようと言ふ段取なんだ。」

「無理をお肯かせなさらうと言ふ、成程。」　　とじろりと額を突出す。

「馬鹿にするなよ。」

「おつと頂戴。

罰杯々々」

と又すぐ

に其の額を敲く。

「すると何うだ、返事をお聞きよ。

（まあ、私に。）と恥かしさうに、すんなりと

した膝の上へ袂を取つて、

（出来ますか知ら、私に

どんなお手習

でございませう。）

餘りしをらしさに、私は思はず顔を見た。臆たけたものだった。鶯が又啼いてね、梅の薫が、ぱつと来る。

（嬰兒を一人、）と實際を喋舌つた、がこれは

と思つた。――動悸がしたよ。あの雪解の水の音。何處かに刻む時計の針が雀のやうに轉る。

半間な事は、慌てた媒妁人が口を利くやうだ。

（まあ。）

（嬰兒なんか仔細なしでせう。）――いや、

これも悪いかね。」

と、草紙樓が今度は巻苜を吸さして、

「お嬢さん、また莞爾して、

（でも　　私には　　でも嬰兒ちゃん

でしたら。）

とふつくりした鹿の子の襟を、悄らしく兩袖で抱
込みながら、

（何んな嬰兒ちゃんでございますの？

お幾つぐらゐな、そして、お頭は？）

私^{わたし}が此^この位^ゐ、と兎^うほどな大^{おほ}きさを手^てで仕^{しか}方^たして、
註^{ちゅうもん}文^{はな}を話^{はな}すとね、

（おかつばさん　　まあお可愛^{かはい}いんでござ
いますわねえ。　　お氣^きに、入^いりますか如何^{いかゞ}
ですか、一生^{しやうけんめい}懸命^{けんめい}にお清^{せい}書^{しよ}をいたして見^みます、そし
てお目^めに懸^かけますわ。）

蜜^{みつ}の如^{ごと}言^ご葉^はです、これぢや雪^{ゆき}の溶^とけた雫^{しづ}が、花^{はな}の
露^{つゆ}に成^なりさうだね。

お小間使が名物の笹巻鮓を、一人分づゝ取分けて、盆に乗せて持つて来た。――三的、と呼ぶ。とろりとして聞いて居た三九は急に呼ばれたので、例の興がった返事なり。

「へいッ」

「いや、お前さんの前だがね、餛飩の玉子綴を箸でちぎる野郎にや、小鱈の鮓は覺束ない。せつかくの思召し、頂戴は勿論、嫌ではないのだが、顔を見るやうに、見ないやうに、退いて、そして横から透かすと、青笹の中は、鮪に、穴子、赤貝の紐、一騎當千の伏勢ばかり、味方と思ふ海苔巻は一つもない。

内端うちはに、優婉しなやかに勧められるのに、お茶ちやばかりも飲のんで居ゐられず、私わたしは弱よわつたよ。打露ぶちま呈まけた。

貴女あなたのお手皿てしよに、密そつとお見掛みかけ申まをしますが、實じつは其その海苔のりを頂いたきたい。

(あら何どうしませう。)

まあ、私わたしは、もう赤あかいのを箸はしをつけて了しまひまし

た。)

(結構けつこうです。)

(でも)

(否いえ、是非ぜひ。)

(では、先生せんせい、其そのお箸はしで。)

(何どう仕つかまつて、貴女あなたのお箸はしで)

(でも、私わたしのでは、何どうぞ貴郎あなたの。)

困こまつた私わたしは、遣切やりきれないから、手てでしよ引びいた。

(失禮しつれい。)

(あら。)

(御免ごめん下さい。)

（まあ、嬉しうございますわ。）と所帯崩して
笑ひながら、袖を口許へ當てなすつた、前髪の媚か
しさ、一輪櫻の品の佳さ。」

と、煙草を持つ手を組んだり、解いたり、兩方の
箸と一所に話が千鳥がけに、こんがらかる、と面中
が擽つたさうに、三九は掌でペろ／＼と撫廻した。

「一時に、ふと、煽切りに咽せたらしく、奥の
縁なる半纏着の兄哥が、續けざまに咳をしたので、
ト此方は齊しく彼方を見た。」

帳場格子の女房は、途端に、はた／＼と胸を煽ぐ。

半纏着は一息吐いたらしく、廂はづれに空を仰い
だ
源氏車の裾に並んだ、銚子の數は七本
に殖えて居る。

「黒地に、白と淺葱櫻の花片ばかりを、
ちら／＼と、所々へ、細い紅で香の圖をあしらつた
友染の羽織を疊んだなり、先刻の小間使が持つて來
て

（お嬢様、お寒くは、在らつしやいませんか、お風邪をめすと不可ません、お召しなさいまし。）

で、いきなりすらりと袂を解いて、左右もあらせず、背後から矢庭に着せる、片袖通りかけたのを猶豫つて、

（まあ、お客様の前で失禮な。）と恚う、撫肩を一寸曲つて、身を揉むやうにした時に、私は、此の仇氣ない嬢さんの、さすがに仕事の苦勞を視た、肩の凝を思つた、かよわさを思つたが――

小間使が、顔を赧らめて手を離さうとすると、（でも、折角だから――御免なさいまし。）と、芋環の模様で紅白を巻きながらすら／＼と、千々に纏れた絲の亂れ、藤色の地の羽織の裏が、綺麗に、細りと成つて、縫るやうに恚う絡はる

┌

「大和屋

└

「む、繪で見た俳優だ、同感だ。寒く成るほど又

美しいと思つた。

三的

お梨映

さんが、其の羽織を着たなりで、其の華奢さで、氷
りついた根岸の道、消残つた雪の蒼いほど冷い宵闇
に、私を送つて出なすつたんだぜ。

ぬく

／＼此方が、外套を被て居られるか、獣臭い、毛織
ものの襟巻なんぞ　――

いや、話も、氷に。近づた、が、最うね、小間使
が、羽織をと言つた時は、障子の日當が一枚ずれて、
床柱が薄すりと暗く成つた。床には籠に投入れの白
玉椿。何とかの色紙と言ひさうな歌の軸が掛つて居
たがね　　急に寒さが身に沁みだ。」

「いよ／＼此處も些と、涼し過ぎるほどでござい
ます。」

と、見返る柱に花は見えぬ、張廻した比羅も墨繪。
其の下に、黄楊の櫛、お梨映さんの容子の佳いの
引つけられるものであらう、襟を掻合せて坐つて居
た。――其時、小婢が又縁側へ、一銚子運んだ
のである。

「春は如何に淺くつたつて、二月と云ふのに、そんなに早く日の暮れよう次第はない。が、
扨て、やがて、暇申して、橋がゝりへ退散をしようとする、折から茶を入れかへて来た小間使に、
ね、と二つばかり囁いて、又
(ね、)とお梨映さんが莞爾する。」

三九唐突に掌を八夕と敲いて、

「さあ、事だ。」

「何。」

「旦那、黙つちや居られませんか。處は根岸で、寮住居のお嬢さん、三もので御酒でがせう。」

「慌てなさんな。」と、吃驚する。

女房は團扇を顔へ、「ほゝほゝ。」

「黙つてお聞き　ー」

（あの、両親が、今日は親類へ参りまして、妹と二人で、留守事に、お汁粉を拵へて居たんでございます。あの、不可ませんか知ら、差上げましては。）

否も應もあるもんですか。お白酒ぢやないけれど、私は雛の客に招かれた光榮を有してね、謹んで二椀頂戴した。もう、其の時分に、椿が光る電燈が点いて、紫蘇の實でお茶と成ると、既にして日が暮れたものなんです　ー、

（でも、横町が暗いんですもの、…… それに、足許が悪くつてお危うございます、凍てゝ迂りますから。）

でね、ちやんと言ひつけてあつたらしい。玄關へ、送られながら、一所に廊下を出た時は、抱柏の紋のついた、あの馬乗提灯を点けた、小間使が立つて居たつけ。

(恐入ります、いや、もう何うぞ。)

背から、着せ掛けられる、安直な外套を、恐縮に
及んで、摺抜けるやうに、ぐいと合はせて急いで出
ると、藍端緒に爪皮の、お嬢さんのと丁ど並んで居
ます。承塵の壁に、もう一つ、白い顔の見えたのは
妹の方らしかった。

(では、きいちちゃん頼みましたよ。)

手を支かれたので、も一つ叩頭をすると、お梨映
さんは提灯を取った格子戸に、ぱつと咲いた明い花
が、トンと肩で出ると、早や枝折戸の梅の枝に朧に
成る。門まで行く路、敷石も長かった。

おまじなひ横町では、まだ二つ三つ店障子にうつ
る燈に、ちら／＼提灯が紛れたつけが、金杉の通を
横に切つて、近路らしい、音無川を向うへ渡ると、
もう塀ばかり、垣根ばかりね、そして雪が蒼い。針
を並べたやうに見えて、目に、すく／＼と痛いくら
み
成程なるほどすべ
にる。

(お危うございます。)

(貴女こそ。)

(私は馴切つて居りますもの。)

が、墓だの、塔婆だのが、凄^{すこ}い星^{ほし}の影^{かげ}に、ばら／＼とあるあたりで、私^{わたし}はふと立^{たちど}停^どまつた。

(しかし、お歸りが案^{あん}じられます。)

(否^{いえ}、唯^{ただ}今^{いま}通^{とほ}りました、直^{すく}てまへの、あの石^{いし}段^{だん}を上^{あが}ります家は親^{しん}類^{るゐ}でございます。それに歩^あ行^るきつて居^をりますから。)

あゝ、此^この前^{さき}途^きに地^ぢ藏^{ざう}尊^{そん}があるんぢやあないか。」

三九^{さんきゆう}が思^{おも}はず乗^のつて出^でて、

「えゝございますよ。」

「來^{らい}教^{けう}寺^じの。」と女^{にょ}房^{ぼう}が言^いつた。

草^{さう}紙^し樓^{ろう}は居^あ直^{なほ}つて、

「豫^{かね}て聞^きいた、其^その地^ぢ藏^{ざう}へ、願^{ぐわん}掛^がけをして居^あなさるんだ。義^ぎ理^りで添^そはれない、

「―― 世間は暗夜だが、月の潮と書く、月潮さんと
言つてね、おなじ畫師で、師匠が一所の、兄妹
弟子の兄さんで、戀人があんなさる。―― 入組
んでるから、事情はこゝちや言はないが―― 玉
章の音信さへ、勿論逢ふことが出来ないでつた、苦
しい、果敢いかなので、何と、寒の中、水垢離を
取るんだつて言ふぢやないか。」

二人は呼吸を呑んで目を睨つた。

「あゝ、此の、美しい、清い、優しいのが、と其の
時熟と然う思つて、思はず顔を視ると、何となく恥
かしい氣が通うか、片袖を胸へ深く、ト其の袖が、
風もなしに向うの袖へ靡くのと袖口を組違へて、た
よ／＼とした白い手首を、恚う、忘れたやうに、提
灯を柄長に取つて、私の方へ差寄せて、細りした肩
へ鬢が着きさうに横を向く。…… 反らした頸が
水のやうに白澄んで、片頬の見える耳のあたりへ、
灯の其の影がほんのり映した。

晝間の梅の暖かさを、鐵のやうな星が吸つて、劍

とも、氷とも、其の夜の寒さと言つたら　――　私
は、我知らず外套を脱いで、手に丸めた。

其なり氣を籠め、心を詰めて、口も利けないで、
一町足らず寂い處を並んで歩行いたが、凍てた路に、
お梨映さんの、足駄の音が、カラともコロとも響か
ない。此に、願掛の往通ひに世を忍ぶ心の中が惟は
れる、と一所に、身に重いものは、平打の簪ばかり。
で、何うやら、座敷の、あの火鉢のもみぢの中を、
雪に誘はれて彷徨ひ出た。あこがれの魂の形とも見
え、切なる戀の生靈のやうにも見えて、凄いが、し
かし、其の思が、尊かつた、氣高かつた。

寺の門に片廂の、地藏尊が、星を額に、灯を裾に
雪を踏んでをがまれた。

私は、うつかり、

（御參詣をなさいませんか。）

（は、）

思掛けないやうに、振向きなすつた。そして、ぢ
つと見た涼い瞳に、思ひなしか、睫を閉す涙がある。

(では、一寸御挨拶を申します。)

(其のお提灯を。)

づつと片側へ遠慮した、が、傍に見ては居られない。手向けるやうに其の白蓮の荅かと思ふ掌が揃ふと、あゝ、色々の褌が石に氷る。冷さ、

寒さは、細い頸を切るやうな、あゝ、せめてもと、此の時思つた、火鉢の繪が颯と幻のもみぢして、其の結綿の上を庇ふと見れば、忽ち其葉も雪に伏つて、背へ散りかゝる、袖へ、しづく。羽織の花が、心念の揺きに響きつゝ震へるのが、亂るゝ雪に宛然で、積る、積る、衣も消える、袖もなく成る、たゞ、一束の雪に成る。其の膚へ、黒髪ながら寒の水、三十日の水垢離の、やつと果てた、いまと思ふと、私は目が暈んで前後を忘れた。時に後毛がはら／＼と、簪がカチリと落ちる。

提灯の柄をキシツと、震へる齒に啣へると、両手で外套を其の肩に掛けた。

(憚りながら、月潮さんの事は存じて居ります。お氣味の悪いことはない、破蓑同然のものですが)

—
お梨映さん。)

少時してお梨映さんが、外套足に、下から密と手を取つて、

(お貸し下さいまし、先生。)

とよろ／＼と立ちながら、其の外套を地藏尊に被せて、犇と縋つて肩を抱いて頬摺して、はつと泣いて

「失禮をします。」

「や、若旦那。」

「お世話でした。」

と、半纏着の兄哥は — これも水見舞であつた — 何處で怪我をしたか、小指を紙で結へたのが、青竹を引挟んで衝と出た。

— 歸つたあとで、此を貴方に、と言置いた、と小婢が私に持つて來た。半紙を巻いた一筆がある。

先生は貴女に惚れて居ます。が、不可ません。
（こゝに、あの二階のと同じ形の火鉢を描いて、
墨にまぜた、もみぢの葉の紅は、まざ／＼と滴る血
汐で） これをお上げなさいまし。

月潮生

梨映様

土間に足を踏んで暖簾を覗くと、淵かと思ふ縁の
中に、月が欄干の立姿。面も浴衣も夕顔の花である。
火鉢の錦葉の散るか、と見えたは、袂をそれた團扇
の色の薄紅、地に落ちぬまに、白鷺が森を飛んで。

向のかはつた、屏風坂の方に、影を曳いて、時に、
悄然として竹をかついだ月潮の後姿は、名ある俳優
の扮したる、少き浦島に肖たのである。

【完】